日本経済と外国人労働者

著　　　　中本博皓

160781136　木下雄介

１章　グローバリゼーションとは

(a)日本の社会に大きな構造変化の波

→グローバリゼーション

→しかし、言葉の定義は多様で困難

本書では、世界規模の動態的システム

(b)グローバリゼーションの意味合い

２０世紀：資本主義と社会主義との対立に象徴

２１世紀：文明の普遍化

(c)文明の普遍化とは

国、地域の超克

→モノやサービス、資本や技術、情報や文化、人の移動が普遍化

(d)経済・経営のグローバリゼーション

→外資系企業の急増

→外国人経営者「移民」の増加

外国人労働者受け入れの認識・政策が必要

(e)グローバル化の深化

→人の地球規模での多国間移動

→日本産業の革新的なアイデンティティ

→産業構造に歴史的な変革の遂行の契機が創出

(f)グローバリゼーションの悪い面

貧困層での不平等化の拡大

２章　グローバルな「人」の移動

(a)地球規模での「人」の移動・流入

受容国でのマイナス面

→社会コストの増加

→しかし、今日において経済のグローバル化は不可避

生産要素が国際間移動の現代

(b)外国人労働者の目的の多様化

外国人の年間入国者数
１９７８年：１００万人強
１９８４年：２００万人強

１９９１年における新規入国者３２４万人
このうち
９２％：短期滞在の観光、商用
　８％：長期滞在の就労(26万人)

(c)外国人登録者数

	1991年	→	2000年
韓国：	６９万人		６３万人
中国：	１７万人		３３万人
ブラジル：	１１万人		２５万人

原因

韓国：自国の経済発展

ブラジル：入管法の改正

(d)長期滞在者

１９６０年～１９９０年

韓国、中国：ほとんど増加なし(60万人)

アメリカなど：１１万人から43万人

この数値は、日本経済のグローバリゼーションの一例

(e)外国人労働者受け入れでの課題

（ア）妥当性への疑問
→人的資源の不足を他国の人的資源で問題解決

（イ)高齢者、女性等の労働力との競合関係
→彼らの就業機会の減少の可能性

（ウ)社会では異文化交流は微々たるもの
→大規模な社会的費用の負担が想定
→経済面、社会面から不適合の見解が多い

３章　外国人労働者受け入れの今後

（a)一定の条件の下で広く外国人労働者を受容
　　→推進の方向へ政策を転換
　　→今後、日本社会のあるべき姿への希求が必要

（b)日本人と外国人の文化の差異を理解
　　多様な価値観の中での共生社会
　　→多文化主義の社会を構築

結論

多文化主義の社会の構築、多様な価値観の共生、の方法を真剣に画策することが必要な時代の到来

目的

　すでに日本が多くの外国人在留の多民族国家・多文化社会という認識が必要